

平成三十一年一月二十九日 最終講義

私は身延山大学で考えた

―過去に学び、未来に託す―

浜 島 典 彦

はじめに

此度、学長任期満了に伴い最終講義を催して戴きました仏教学部長望月真澄先生はじめ関係各聖に御礼申し上げる次第です。タイトルは「私は身延山大学で考えた―過去に学び、未来に託す―」としましたが、少し教化学、近代の仏教界動向、教育に関わる事項につきまして話をさせていただきます。

私が住職しております西日暮里修性院の玄関には、仏教詩人坂村真民さんの直筆「めぐり合いの不思議に手を合わせよう」という額が置いてあります。私の出身地は三重県桑名市で、寿量寺という寺の長男として昭和二十六年八月に生まれ、本当は跡を継がなければならなかったのですが、寺不孝、檀家さん不孝、親不孝をして現在に至っております。

桑名寿量寺は慈覚大師円仁（七九四―八六四）の開創で妙蓮寺といい、室町期に入り圓教院日意上人（一四四四―私は身延山大学で考えた（浜島）

私は身延山大学で考えた（浜島）

一五一九）に依り日蓮宗へ改宗した寺であります。京都本山妙伝寺を開かれた後、第十一行学院日朝上人（一四二二—一五〇〇）に後事を託されて身延山へ晋董、第十二世の法灯を継がれた方であります。実は、日意上人の弟子に第十四世善学院日鏡上人（一五〇七—一五九）がありました。日鏡上人は弘治二年（一五五六）に西谷檀林、即ち現在の身延山大学の淵源を作った方であるのです。従いまして、深遠なる仏縁を感じる次第であります。

中学では、卓球と野球に没頭、殊に卓球は三重県の北勢地区の個人チャンピオンとなりました。生徒数は四百人弱七クラス学級、文武両道の中学時代で一・二年生の後輩からとても慕われていたようです。地元の高校を卒業したのですが、三年生の時、父親に内緒で国立大学法学部の願書を取り寄せましたら、それが発覚して破り捨てられ、担任の先生から立正大学仏教学部に進まないようなら退学させてくれという内容の父親からの手紙を見せられました。先生から僧侶を目指せと説得されてしまったのです。当時、NHK解説委員長を務めていた平沢和重さんに憧れ、外交官はたまた弁護士となることを夢見た少年でしたが、本当に嫌々ながら頑固な父親の意志に歯向かうことが出来ず、上京した次第です。今考えますと、この受験という人生の転機を変えていたなら、今頃、悪徳弁護士？になっていたかも知れません。

宗立谷中学寮に入り、菅野啓淳寮監先生（現池上本門寺貫主）の薫陶を受け、卒業後は布教研修所に入るつもりだったのですが、卒業論文（主査茂田井教亨先生）が以外にも良くできていたようで、怖い教学の権威と恐れられた茂田井先生からお褒めの言葉を戴き、また、渡邊寶陽先生がわざわざ父親を説得に郷里まで足を運んで頂き、大学院へと進んだのでした。

修士課程修了後、『日本一の説教師になったるんや』の思いは捨てきれず、布教研修所へ入所、翌年は書記も拝命し

ました。その後、結婚し、郷里での僧職に就いていたのですが、小野文琬先生から埼玉県熊谷市立正大学キャンパス内にある宗立学寮の寮監を依頼され、以後、十七年にわたりまして僧侶育成の現場監督を果たしてきました。

この間、仏教学部・教養部の非常勤講師を勤め、磯貝静江先生と共に仏教賛歌サークル「プリンダリーカ」を創設、先生の教え子、東京芸大のOBと共にハーバード大学・ボストン大学・ルイス&クラーク大学・ハワイ大学等と交流、殊に国連本部ではアナン事務総長の前で歌声を披露（私は歌に参加していない）、小和田国連大使（雅子妃の父親）から労いの言葉を、総長とはツーショットして頂きました。また、四月八日の花まつりには熊谷キャンパスで音楽法要、節分会には学寮本堂にて野球部と白菊学寮（女子寮）を招いて盛大に豆撒きをしました。西武西口投手、日本ハム武田投手等も『福は内』をやってくれました。その他、日本文化を大切にということで香道部（直心流）を興し、両クラブがご縁で結婚したものの複数存在します。寮監時代はとても楽しい時代でございました。教え子は約三百五十人を数えます。

修性院、大日蓮展、日蓮宗伝道部

平成十二年の初夏、縁ありまして西日暮里にあります通称「花見寺」修性院の住職を拝命、幕末、歌川広重が浮世絵「江戸百景」のなかに描き、谷中七福神「布袋尊」が祀られた江戸庶民に親しまれた寺でもあります。住職になりましてから十九年が経ちますが、先ず最初に行ったことは掲示板の設置と土塀をピンクにしそのなかに「布袋尊」タイル童画をはめ込むことでした。

月に一度、自筆で他者の心に響く言葉を掲示することは大変ですが、何とか今日まで続いております。また、塀を

私は身延山大学で考えた（浜島）

私は身延山大学で考えた（浜島）

ピンクしたのは「花見寺」のイメージをアピールしようと思ったのですが、当初は「谷中に相応しくない色」と谷中の長老、お檀家さん云われてしまいました。今では「あのピンクの寺」といことで目印になっているようです。

住職になって間もなく、日蓮宗宗務院から東京国立博物館平成館で立教開宗七百五十年を記念した日蓮聖人展を開催するから企画・実動を手伝うようにとの依頼があり、日蓮門下の全国の寺々を東京国立博物館の方々と共に訪ねました。本当に楽しき時を過ごさせていただきました。この「大日蓮展」が終了しましたら、今度は日蓮宗宗務院の機構改革を行うから、新しい宗門運動の要となる伝道企画を担当する課長に就任してくれないかとの打診がありました。

住職になったばかりで寺を留守にするわけにもいかないと思っていましたが、恩義ある方からの依頼でもあり、引き受けてしまいました。課長四年、嘱託一年でしたが全国を飛び回り、宗門運動「立正安国・お題目結縁運動」の旅立ちを手伝わせていただきました。院では行政の在り方、殊に帯広市長を長年務められた田本憲吾先生（元日蓮宗檀信徒協議会副会長）からそのノウハウを教えて頂きました。

身延山大学

平成十二年の秋九月のある日、身延山から一本の電話がありました。「身延山大学の学長に推薦したい」という内容でした。即座に断るわけにいかず、一週間後にお断りをしようと思っていたのですが、一応四人の恩ある方に相談したのです。結果は、二対二、ある方は『火中の栗ではなく、火中の爆弾を拾うことになるから止める』といわれてしまいました。しかし、最後にお伺いした恩人宅には身延山大学の資料がドッサリ置いてありました。曰く『これを持って大学に行きなさい』と。意を決し、その年の十二月朔日より身延山大学にお世話になることになりました。

今、日本は超少子高齢化社会へとまっしぐら、大学の約四割が定員割れ、地方大学となると六割となっています。

身延山大学は六百余校の私立大学のなかにありまして、教職員との距離が誠に近い極少人数大学、仏教に特化した大学としての位置付けが出来ましょう。『何とかせねば!』の思いでこれまでやってまいりました。

現在、定員は一学年三十名となりましたが、身延山あるいは日蓮宗からの多額の助成が無ければ、成り立たない大学であります。学納金だけで賄うとしましたら、四百人を超える学生の確保が必要となります。山間部、アクセスも悪い、インフラをあまり整備されていない大学に如何にして足を運んでいただくのか。

定員を満たすことは、大学に魅力を感じて頂かなくてはなりません。身延山大学は仏教に特化した大学として世間の人にどう映っているのでしょうか。例えば、仏像工房は外務省、身延山内、山梨県、東北の被災地ではかなり認識されております。社会人、他大学を終えた方、棲神の地に憧れを抱く方、そのような方々をターゲットとしては如何か。

もう一方で、魅力があるためには大学の教員には三つの類型が必要だと私は考えています。一つは学者中の学者、世に通じる学者の存在。二つめは熱心な教育者、そして、三つめは調整役の存在、身延山、日蓮宗、他大学、政財界、地域社会とパイプを繋げる人材。この三者があつて大学は機能すると思つて居ります。

宗門運動について

現在、日蓮宗では宗門運動「立正安国・お題目結縁運動」を展開中ですが、それ以前に「立教開宗七百五十年」「立正安国論奏進七百五十年」に関わる事業を推進してきました。そのなかに「お題目写経」あるいは「登詣の証」とい

私は身延山大学で考えた（浜島）

私は身延山大学で考えた（浜島）

う事業あるいはカードを作製しました。

結論から言えば、祖意（日蓮聖人の御心）に沿わない事業は成功しないということ、そうて、もう一点は教学をきちんと理解していない事業は失敗するということでもあります。

お題目は何故お経なのか、五種法師（受持・読・誦・解説・書写）のなかでお題目は受持行である筈です。何故、それが書写になるのか、『法蓮鈔』（定遺九四八頁 建治元年（一二七五））にはそれが明らかにされています。

「但行礼拝」と書かれている身延山への「登詣の証」（日蓮宗伝道部発行）、この初版の証の裏に「お題目を唱えて菩薩となろう」と書かれていました。囑託でありました私はそのことを聞いておりませんでしたので、即座に伝道部長に忠言しました。『お題目を唱えて仏と成ろう』の間違いではないですかと。心配していたことが現実となり、勸学院の先生からお叱りを受け、回収することになってしまいました。

此度の宗門運動の事業九項目には、「教学の振興」「法器育成」が入っておりません。教学の研鑽、教育体制を確りとすれば宗門の未来は明るい、この二つを重点項目としなければ明日の宗門はないと思料するものであります。

他宗の宗門校

年に一回、仏教系大学会議（短大を含む）が開かれ、この会議に約六〇校（日蓮宗は三校 身延山大学・立正大学・東京立正短期大学）が加盟しておりますが、出席する度に思うことは、浄土系・禅系の大学そしてその傘下にある中等教育を教学理念に則りしっかりとやっておられると感服するばかりでなく、その後押しを宗門が力を入れておられると実感するばかりであります。

例えば、四年前に龍谷大学は瀬田キャンパスに「草木国土 悉皆成仏」の基本理念のもと農学部、佛教大学は七年前に二条キャンパスに看護学科（水谷幸正学長の発想 浄土宗第三祖念阿良忠の著わした『看病用心鈔』を理念として）を開きました。この他、淑徳大学に看護栄養学部、武蔵野大学に看護学部・薬学部、駒澤大学に医療健康科学部、愛知学院・鶴見大学に歯学部……等、生命科学に関わる分野を仏教的観点に基づき開設しているのです。

更に、仏教各宗の中等教育を見えますと、真言宗では高野山・京都洛南・大阪清風……、浄土宗では大阪上宮・上宮太子・名古屋東海・東京芝……、浄土真宗では龍谷平安・京都女子・東京千代田学園・三重高田……、この他東大寺学園・四天王寺学園・世田谷学園等、著名な高校・中学がずらりとあります。

このような仏教各宗の高等・中等教育のルーツは何処にあるのでしょうか。その淵源は檀林にあり、近代においては大教院・中教院・小教院という教院制度に求められるのです。

過去に学ぶ

明治初年、太政官布告によって「神仏分離令」が発せられ、神道国教化策を謀る明治維新政府は仏教を前代の庇護下にあつた扱いから従属させる処置をとります。

仏教各宗は廃仏毀釈の嵐が吹くなか、敢えて従属策に応える形で、教部省管轄の下に僧職が神道を学び宗教行政をも掌る神仏合併大教院を芝増上寺に設け、神殿を建立、周りに各宗の行政機関を配置したのでした。

維新政府は英国をモデルとした富国強兵策を目論んだのであります。つまり、日本神道に英国聖公会的な役割を期待したのでした。ところが、それが見事に失敗します。神仏合併大教院を頂点とした教院制度に浄土真宗が反旗を翻

私は身延山大学で考えた（浜島）

私は身延山大学で考えた（浜島）

し、神道内部の伊勢グループと出雲グループの対立が激化し、合併大教院は明治八年に解体されてしまいました。

しかし、住職となるには教院で神道教義を学び教導職合格者（十四階級（権訓導から大教正））からなる教導職を取らねばならい）でなければならず、また、仏教教義のみの布教は禁じられていました。それが明治十七年まで続くことになるのです。

当時の「朝野新聞」、仏教誌「明教新誌」を見ますと、神官と僧職との学識の高さが歴然とあったことが報じられています。大教院内で教導職の試験をしても、上位には必ず僧職ありました。仏教界が圧政を受け、廃仏毀釈の嵐を乗り越えることが出来たのは奈辺にあったのでしょうか。

それは、前代に存在した法器養成の場合、檀林で培われた高い教育と篤い信仰心によって危機が回避されたといっても良いのであります。江戸期にあった各宗の檀林制度（明治五年八月「学制」公布により廃止）が明治期に入っても良き影響を与えたのでした。

日蓮宗にあつて、新しい時代への改革推進のリーダーとなったのが初代管長新居日薩和上（一八三〇—一八八）でした。管長にはそれだけの権限が政府から付与された時代でもありました。日薩和上は教団の新組織・新体制を構築するためにバックアップ体制を整えようしました。従来の講中・結社ではなく教団の財政を直に支援する体制、檀家制度に頼るのではなく、各教区に妙法清浄講結社を結成して教団を支え、法器育成に充て、住職を派遣制にするという企てをしたのであります。

しかし、この企画のなかの法器育成について、明治十七年に教院制度が教団に委ねられた後、八教区に中教院が設けられ教育機関となるところでありましたが、日薩和上の遷化によって頓挫してしまいます。一方、他教団は先ほど

記しました中等教育の著名校は、明治期の中教院が改組発展したものが数多くあります。それ等の著名校の基本理念には必ず各教団の教義が盛り込まれているのであります。

日蓮宗においては個人、あるいは有志寺院が教育機関を設立しております。小石川有得館、赤坂愛敬女学校、神奈川寿実補習学校、京都慈光夜学校、京都明德学園、熊本星山高等女学校、杉並立正女子高校、福井家政学院、旗の台立正学園高等女子校……等がありますが、その多くが消え、旗の台立正学園（現文教学園）のように他者の手にわたることもありました。

現在、日蓮宗系の教育機関として立正大学学園、身延山学園、堀之内学園、日本福祉大学、明德学園等が存在しますが、多くの教育機関で日蓮聖人の教法を基とした基本理念が薄められていくのは残念でなりません。

未来に託す

身延山大学は、身延山・日蓮宗・檀信徒と太いパイプを繋ぎ、応援団を構築する必要があると考えます。

その例が存在します。日本基督教団が経営する東京神学大学であります。大学の定員一学年二十名、そして、修士、博士課程を有する大学院をもっています。大学の充足率は五九%（平成二十九年度）、一年生の入学者は毎年二・三名、編入学が多いのです。この状況にあっても大学基準協会の認証評価は「適合」となっています。何故か、財政が安定しているからです。一箇所からの寄付金ではなく、日本基督教団のメンバーが大学を支える会を組織し、多額献金をしているのです。「一人の牧師を育てるために」「一人の神学者を育てるために」と喜捨するのであります。

身延山大学版の応援団をお山と共に組織していくことが肝要、お山とベクトルが同じ方向を向くことがとても大切

私は身延山大学で考えた（浜島）

私は身延山大学で考えた（浜島）

であると思うのです。身延山大学が栄え、身延山も栄える、共に歩むことがとても大事なことであるのです。

むすび

以上、タイトルに沿いまして概観してまいりましたが、過去に学びます原点は近代においては前代遺産にあると言えます。日蓮宗においては関東八檀林、関西六檀林で培われた人的資源によって明治初期に吹き荒れた仏教弾圧を乗り越えることが出来ました。

以降、日薩和上により日蓮教団は新時代に相応しい行政、教育体制が構築されるところでしたが後継者が育ちませんでした。確かに教育界に限って見ますと、個々、有志による高等教育・中等教育の場が設けられていますが、教団のバックアップ体制、教師の意識が低いために志半ばで消え去った組織が数多く存在します。他方、他教団には全力を傾注したリーダーが陸続と登場し、教団内の個々の教師の熱い思いが実を結んでいきました。代表的な人物をあげますと、浄土真宗の高楠順次郎・清沢満之・曾我量深・金子大榮、浄土宗の長谷川良信、水谷幸正……等であります。

私は思うのです。何故、「お題目写経」「お題目を唱えて菩薩となろう」という誤りが起こるのか。ズバリ、教学の研鑽、真の仏教教育がなされていない結果であると思料します。三離れが起こっている現今ではありますが、もし今、明治初期のような庄政が来たならば教団はひとたまりもなく滅んでしまうであらうでしょう。

現在、立正大学仏教学部宗学科、身延山大学は定員割れをしております。両大学の法器育成、研究機関が近い将来存亡の危機に立たされようとしております。今こそ教団の叡智を集め、教師一人一人が教学・教育に熱き思いを抱けば、日蓮教団は足腰の強い組織として復活するに違いないのであります。

これまで六十七年の人生を歩んできましたが、本当に素晴らしい恩師、先輩、友人、後輩、教え子に恵まれてきました。感謝、感謝の日々であります。

日蓮宗宗務院より「宗務委員」拝命、日本高等教育評価機構より「適合」、国際協力基金・仏教伝道協会より「ラオス仏像修復プロジェクト」助成、本館耐震工事費目標額達成、宗務院からの行学寮助成、京都特別公開講座（サテライト構想に向けて）・東京公開講座・身延山公開講座開催、大学開学二十周年記念事業、仏教学部二学科から一学科（三専攻制）への改組、そして日蓮宗・立正大学・身延山大学三者協定調印等、多くの難儀な事柄がございました。我儘な私どもにお付き合い頂き何とかこれまで乗り切って参りました。これ等が成就したのもお祖師さまのお導き、素晴らしい周囲の方々に恵まれた賜物と思っております。皆さんのお陰で八年四ヶ月を無事終了することができました。ありがとうございました。